

第9回「マックスマラ・アート・プライズ・フォー・ウィメン」 アーティストのドミニク ホワイトが受賞

マックスマラは、コレツィオーネ・マラモッティとホワイトチャペル・ギャラリーと共に、第9回「マックスマラ・アート・プライズ・フォー・ウィメン」をDominique White（ドミニク ホワイト/1993年生）が受賞したことを発表いたします。

女性アーティストを支援・助成するために設けられた本賞により、ホワイトは作品制作のため、6か月間イタリアに滞在する機会を付与され、さらに2024年にホワイトチャペル・ギャラリーにて大規模な個展を開催。その後、同展はイタリアのレッジョ・エミリアにあるコレツィオーネ・マラモッティに会場を移します。

2023年3月28日、ホワイトチャペル・ギャラリー館長を務めるGilane Tawadros（ジレーン タワドロス）とマックスマラ・ファッション・グループCEOのLuigi Maramotti（ルイジ マラモッティ）の共同ホストにより、ホワイトチャペル・ギャラリーで開かれた特別授賞式で受賞者が発表されました。

ホワイトは、Rebecca Bellantoni（レベッカ ベラントーニ）、Bhajan Hunjan（バジヤン フンジャン）、Onyeka Igwe（オンエカ イグウェ）、Zinzi Minott（ジンツイ マイノット）を含む最終候補者の中からRozsa Farkas（ローザ ファルカス / ギャラリスト）、Claudette Johnson（クロードット ジョンソン / アーティスト）、Derica Shields（デリカ シールドズ / ライター）、Maria Sukkar（マリア スッカー / コレクター）からなるアート界のエキスパートたちの審査により選出されました。審査委員長は、本賞ゲストキュレーターのBina von Stauffenberg（ビーナ フォン シュタウフェンベルク）が、ジレーン タワドロスと共同で務めました。

ドミニク ホワイトは、マルセイユとエセックスを拠点に活動しています。彫刻家にしてインスタレーションアーティストであるホワイトは、「黒人（Blackness）」のための新しい世界を創造することに関心があり、海の持つ隠喩性と再生力に魅了されています。彼女が制作するのは、幽霊のように儚げでありながら、きわめて実体感のある作品で、古びた帆、マスト、焼け焦げたマホガニー、鎖、ロープといった朽ち果てた船舶の遺物、またカオリン粘土や未処理の鉄といった素材を多用します。黒人の主観性、アフロ ペシミズム、「（甲板）下からの海上統治」（Hydrarchy from below / 陸を支配する個人の能力を、海を通じて解体または覆すこと）といった理論と黒人離散民に関する海の神話とを紡ぎ合わせて、制作活動を行います。ホワイトは、「難破（し

た)」という言葉が再帰動詞として、また自身の作品に内在する解放を体現するものとして再定義します。ホワイトの彫刻あるいは「灯台」は、「まだ実現していないが実現しなければならない（黒人の）未来」である、海に囲まれた想像上の国籍のない世界を想起させます。

第9回「マックスマラー・アート・プライズ・フォー・ウィメン」を受賞したホワイトの提案は「Deadweight（載貨重量）」と題されています。「載貨重量トン数」という尺度を出発点とし、船が沈むまでにどれ程の重量を載貨できるかを算出する、海運業界で用いられる公式用語です。本プロジェクトでは、ホワイトのアートおよび政治への関心を追求し、さらなる物語と文化的レイヤーに取り組みながら、イタリアにおける6カ月の滞在期間中にリサーチとさらなる展開を目指すことになります。

リサーチ、メンタリング、研究、研修旅行、スタジオワークを通じて、ホワイトは「載貨重量トン数」の意味を探り、歴史上の奴隷貿易や地中海におけるその現代的形態との関連性を追求することになります。歴史学者やジャーナリストと協力しながら、リサーチの一環としてイタリア南部の主要な場所を訪問します。本レジデンシー・プログラムには、海洋博物館、アーカイブ、コレクションの見学、打ち捨てられた素材を求めての造船（廃船）所巡り、作品の制作に必要なとされる製作プロセス、技能、技術についての理解を深めるため、伝統的および現代的な金属加工職人との協力も含まれます。「Deadweight」制作活動の一環として、ホワイトは完成した作品のさまざまな要素をイタリアの西側に広がるティレニア海に沈めるつもりです。これはその後、2024年に開かれる個展の基礎をなすことになります。

ドミニク ホワイトは次のようにコメントしています。

「今回、マックスマラー・アート・プライズ・フォー・ウィメンを受賞できたことを誠に光栄に思うとともに、実現不可能とも思える技能の開発や壮大なリサーチの実現だけでなく、新作の完成をサポートいただける本賞の受賞者となれたことに感激しています。また、レベッカ ベラントーニ、バジヤン フンジャン、オンエカイグ ウェ、ジンツイ マイノットとこの特別な場を共有できたことに心から感謝するとともに、この一生に一度の機会をいただいたことを審査員団、ホワイトチャペル・ギャラリー、マックスマラー、ならびにコレツィオーネ・マラモッティに、改めまして深く感謝いたします。」

ジレオン タワドロスは次のようにコメントしています。

「審査員団とホワイトチャペル・ギャラリーを代表して、今回マックスマラー・アート・プライズ・フォー・ウィメンを受賞したドミニク ホワイトにお祝いを申し上げたいと思います。最終候補の中で最年少のドミニクの提案は、最終的に女性自認アーティストが自分を取り巻く世界について語り、かつ、世界に語りかけるプロジェクトを開発・制作をサポートするという本賞の狙いに完全に合致した、創作アプローチの成熟度、厳密さ、一貫性を示していました。作品の中で彼女が探求するテーマは非常にタイムリーかつ今日的意義のあるもの感じられます。レジデンシー期間と個展を通じて、彼女をサポートできることを嬉しく思います。避難所や安全な場所が切実に必要とされ、個人や集団の渡海が、人命にとって大きなリスクをもたらすと同時に、きわめて多くの不当行為が露呈している今、移動とアイデンティティを統制する歴史上の制度と現代の制度両方を問い質して探ることは、とりわけ急務と思われれます。」

ルイジ マラモッティは次のようにコメントしています。

「マックスマラー・アート・プライズ・フォー・ウィメンがすべてのパートナーやステークホルダーにとってきわめて特別なプロジェクトであり続けていること、そしてホワイトチャペル・ギャラリーの新館長であるジレオン タワドロスによって熱烈に支援されていることを嬉しく思います。本賞は、イタリアでの長期レジデンシーを

通じ、アイデアをふくらませ壮大なプロジェクトを実現するべく芸術分野の研究に集中的に取り組む、またとない機会を受賞者に提供します。ドミニク ホワイトがこの機会を最大限に生かしてくれることを確信しています。」

英国唯一のビジュアルアート賞である「マックスマーラ・アート・プライズ」は、2005年以来隔年で授与されており、これまで個展開催経験のない、英国を拠点に活動する新進女性アーティストを対象としています。パートナーであるマックスマーラ、ホワイトチャペル・ギャラリー、コレツィオーネ・マラモッティは、本賞の様々なフェーズで協力し合っています。

お問い合わせ先：

・コレツィオーネ・マラモッティ

Zeynep Seyhun : +39 349 0034 359 / zeynep@picklespr.com

Maria Cristina Giusti : +39 339 8090 604 / cristina@picklespr.com

・ホワイトチャペル・ギャラリー

Madeline Adeane : +44 203 137 5776 / madeline@reesandco.com

Colette Downing : +44 207 539 3315 / colettedowning@whitechapelgallery.org

ドミニク ホワイトについて：

ドミニク ホワイトはゴールドスミス・カレッジで美術の学士号、セントラル・セント・マーチンズで美術およびデザインの準学士号を取得しました。近年の個展や展覧会には以下があります。「May You Break Free and Outlive Your Enemy」、La Casa Encendida (ラ・カーサ・エンセンディーダ)、「ステートメント」セクション、アート・パーゼル (パーゼル/スイス、2022年) ; 「The Cinders of the Wreck, Triangle」 (マルセイユ/フランス、2022年) ; 「Hydra Decapita」、VEDA (フィレンツェ/イタリア 2021~2022年) ; 「Blackness in Democracy's Graveyard」、UKS (オスロ/ノルウェー 2021年)。近年のグループ展には以下があります。「Afterimage at MAXXI L'Aquila」 (ラクイラ/イタリア 2022~2023年) ; 「Love at Bold Tendencies」 (ロンドン/英国 2022年) ; 「Techno Worlds at Art Quarter Budapest」、Goethe-Institut(ゲーテ・インスティトゥート) による委託作品 (巡回展) (2021~2025年)。ホワイトは、2022年のFoundwork Artist Prize (ファウンドワーク・アーティスト・プライズ/米国) を受賞したほか、Artangel (アートエンジェル/英国)、2020年にHenry Moore Foundation (ヘンリー・ムーア財団/英国) から賞を授与、2019年にはVEDAでの個展に合わせて、Roger Pailhas Prize (ロジェ・ペラ・プライズ/Art-O-Rama、フランス) を受賞しました。2020年と2021年には、Sagrada Mercancía (サグラダ・メルカンシア/チリ)、Triangle France - Astérides (トリヨングル・フランス - アステリド/フランス)、La Becque (ラ・ベック/スイス) でアーティスト・イン・レジデンスを務めました。

「マックスマーラ・アート・プライズ・フォー・ウィメン」について：

9回目を数える「マックスマーラ・アート・プライズ・フォー・ウィメン」は、ホワイトチャペル・ギャラリーの元館長Iwona Branzwick (イヴォナ・ブランズウィック) が発案しました。2005年にマックスマーラ・ファッション・グループと共に創設され、2007年からはコレツィオーネ・マラモッティが共催に加わった、隔年開催の賞。英国を拠点に活動する新進女性自認アーティストを対象とする、その種のものとしては唯一のビジュアルアート賞であり、必要不可欠な時間と場所、創作面・キャリア面のサポートを提供することにより、認知度向上と、野心的な新作を制作するためのリソースを通じ、キャリアの正面場を迎えているそうしたアーティストを後押しし助成することを目的としています。

本賞は、これまで大規模の個展・特集展の開催経験がない、英国を拠点に活動するあらゆる年齢の女性自認アーティストを対象としています。ギャラリスト、評論家、アーティスト、コレクターで構成され、ホワイトチャペル・ギャラリー館長を委員長とする審査員団は、毎回、女性自認アーティストの候補リストを提出し、その中から5名の最終候補が話し合いで決定されます。本賞に照らした新提案の強みに基づいて選出される受賞者には、コレツィオーネ・マラモッティによって組織されるイタリアでの6か月間のレジデンス、ならびに個展開催の機会が与えられます。レジデンスは、アーティストとその受賞新提案のニーズとフォーカスに合わせて独自の内容が与えられます。重要なことに、レジデンスは新作を実現するためのリソースと場所を提供し、これはその後、ロンドンのホワイトチャペル・ギャラリーとイタリアのレージョ・エミリアにあるコレツィオーネ・マラモッティで翌年開催される大規模個展の基礎となります。その後、コレツィオーネ・マラモッティは同館のワールドクラスのアートコレクションに収蔵するため委託作品を買い取って、2年ごとの賞サイクルを超えてアーティストが確実にサポートと認知を得られるようにします。「マックスマーラ・アート・プライズ・フォー・ウィメン」は、創作プロセスを表彰・支援する点で独自かつ類を見ないものであり、ブリテッシュ・カウンシルアート&ビジネス国際賞を2007年に受賞しました。

マックスマラーについて：

故Achille Maramotti(アキレ マラモッティ)によって1951年に創業されたマックスマラーは、イタリア流のラグジュアリーとスタイルを体現、パワフルな現代女性のためにデザインされたプレタポルテとアクセサリーのコンテンポラリーコレクションです。

タイムレスなデザインと贅沢な生地で名高いマックスマラーは、シックなコート、シャープなスーツ生地、モダンなアクセサリーで知られるエレガンスの鑑です。マックスマラーは世界100カ国以上の2,500店を超える店舗で販売され、またマックスマラー・ファッション・グループは、9つのブランドを傘下に収めています。株式非公開を保っておりマラモッティ家が経営にあたっています。

www.maxmara.com

コレツィオーネ・マラモッティについて：

2007年に一般公開された現代アートのプライベートコレクションで、マックスマラー本拠地であるレッジョ・エミリアに位置しています。1950年から2019年までの200点以上の常設コレクションを所有しています。常に新たなプロジェクトを立ち上げ、世界中の新進および中堅アーティストの作品を展示しています。

www.collezioneMaramotti.org

ホワイトチャペル・ギャラリーについて：

一世紀以上にわたり、現代の巨匠から同時代の世界一流のアーティストの作品を発表しているギャラリー。新人および著名な女性アーティストの作品を展示することで広く知られ、バーバラ ヘップワース (1955年)、エヴァ ヘス (1979年)、フリーダ カーロ (1982年)、ナン ゴールディン (2002年)、ソフィ カル (2009年)、ジリアン ウェアリング (2012年) およびサラ ルーカス (2013年) の主要な個展を開催しました。国際的に近代・現代芸術の礎を築き、ロンドンの文化社会で中心的な役割を果たしています。また、世界で最も活発な現代芸術地区の継続的な成長の中核となっています。

「マックスマラー・アート・プライズ・フォー・ウィメン」歴代受賞者：

エマ タルボット (2019 - 22) – タルボット (1969年生) のインスタレーション「The Age / L'Età」は、アニメーション、シルク製の絵入り垂れ幕、立体作品、ドローイングで構成。本作品は、表象と老い、権力と統治、自然に対する態度といったテーマを探っています。マックスマラー・アート・プライズ・フォー・ウィメンに向けて、タルボットは人類が末期資本主義の悲惨な末路に直面し、生き残りのため - 古代の権力構造を見直して自然界を称える - より古代的でホリスティックな工芸や帰属のあり方を目指さねばならなくなるという、未来の環境を想定しました。タルボットの作品は、Cecilia Alemani (セシリア・アレマーニ) がキュレーターを務めた第59回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展のメイン展示「The Milk of Dreams」に出展されました。

ヘレン カモック (2017 - 19) – カモック (1970年生) は、自身の「Che si può fare (何が出来る)」展で、映像、ビニールをカットしたプリントのシリーズ、スクリーン印刷されたフリーズ、および、さまざまな歴史や地理にわたる女性の生の中で嘆きの概念を探る著書を展示しました。

エマ ハート (2015-17) – ハート (1974年生) は半年間のミラノ、トーディ、ファエンツァ滞在中に、大規模な「Mamma Mia!」と題した作品を制作。

コリン スウォーン (2013-15) – スウォーン (1976年生) は、16世紀イタリアの即興演劇「コメディア・デラルテ」からインスピレーションを受けた作品を制作。スウォーンは2015年、リーバーヒューム賞を受賞。国際的にすでに高く評価された業績をもち、将来の活躍が期待できる研究者に贈られる賞です。

ローラ プロヴォスト (2011-13) – プロヴォスト (1978年生) は、マックスマラー・アート・プライズ・フォー・ウィメンのために挑戦的なラージスケールのインスタレーションを制作し、2013年のターナー賞を受賞。

アンドレア ビュットナー (2009-11) – マックスマラー・アート・プライズ・フォー・ウィメンのために制作された絵画作品「The Poverty of Riches」と「Untitled」(2011年) がホワイトチャペル・ギャラリーを代表する展覧会「Adventures of the Black Square」(2015年) で発表されました。

ハンナ リッカーズ (2007-2009) – 受賞によって以前から追究していた意欲的な作品の制作を実現。2015年、リーバーヒューム賞を受賞。2014年にはモダン・アート・オックスフォードにて展覧会を開催。

マーガレット サーモン (2005-2007) – イタリアを旅し、母性をテーマとしたモノクロームのフィルム作品を制作。2007年のヴェネチア・ビエンナーレで発表されました。